

## 食べたい！と思わせる 高村光太郎の牛鍋の詩

食べ物を歌った詩歌は数多くあるが、読んで思わず食欲をそそる作となると、高村光太郎の次の作品をあげたい。

『米久の晚餐』

八月の夜は今米久にもうもうと煮え立つ。

鍵なりにあげひろげた二つの大部屋に

べったり坐り込んだ生きものの海。

バットの黄塵と人間くさい流電とのうづまきのなか、

右もひだりも前もうしろも、顔とシャツポと鉢巻と裸と

怒号と喧騒と、

麦酒瓶ビールびんと徳利と箸とコップと猪口ちよこと、

こげつく牛鍋とぼろぼろな南京米と、

さうしてこの一切の汗にまみれた熱気の嵐を統御しながら、

ばねを仕かけて縦横に飛びまはる

おうあのかくれた第六官の眼と耳とを手の平に持つ 銀杏返しの獯猛なアマゾンの群と。

八月の夜は今米久にもうもうと煮え立つ。(以下略)

残念ながらスペースの関係で続きを紹介できないが、全六十三行の大作である。大正十年

の作で「明星」に発表された。

詩集『道程』に収められているので、ぜひ全編を味わってほしい。一つの店の一つの料理が詩に歌われたのは、おそらくこの作だけだろう。真夏の牛鍋屋のもうもうたる熱気と動きをエネルギーに歌いあげている。

この詩に歌われた「米久」は創業明治五年、その屋号は初代久次が近江の米屋だったことによる。浅草で文明開化の味を伝える牛鍋屋の名店である。ここでは肉を牛一頭丸ごと仕入れるという。牛肉のおいしさは部位で決まるのではなく、牛そのものがいいか悪いかによるという信念からである。味付けは一定で手早く食べさせるため、割り下を使う東京風を守っている。少なめの割り下で肉をさっと煮て、煮上がるそばから食べるに限る。

